

本の紹介：

「日本の風穴」

清水長生・澤田結基著

紹介：林 一六*

日本の風穴

清水長生・澤田結基著 2015年(平成27年)、
283頁、古今書院、5,500円

最近、「日本の風穴」というたいへんユニークな本が出ました。風穴というのは、本書によれば、「夏に山の斜面から天然の冷風が吹き出す穴、またはそうした現象を風穴と呼ぼう」というように定義されています。気温30℃前後の夏の日にもその穴から10℃以下の自然の冷風が吹き出している場所があるとは不思議なことです。また、夏に冷気が吹き出す穴とは別に冬には外気より暖かい空気を吹き出す温風穴という穴も見つかっており、その温風穴と冷風穴とは地下でつながっているそうです。

内容は、四部、20章からなり、風穴の定義、冷風の吹き出すしくみ、風穴についての調査研究報告、各地からの報告、風穴の利用などについて書かれています。

風穴は日本列島の西南諸島をのぞく全ての地域に分布していて、著者による日本全国の風穴の分布図が示されています。また巻末資料として全国の風穴所在地が記載された「全国風穴一覧表」がついています。この資料は著者が全国を現地調査した結果できわめて有益なものであります。

第一部では風穴とはどういうものかについての説明があり、風穴が作られる自然的背景としての地質、地形条件について記述されています。それによると、風穴ができる地形的な条件は崩落した岩のかけらや比較的大きな岩の堆積した斜面の岩盤に出来た大きな岩の割れ目、溶岩トンネル、鍾乳洞などがあるということです。そして、それらの風穴の具体的な例が示されています。それとともに、風穴が人々の生活にどのように利用されてきたか、具体的な例があげられています。

このような不思議な現象がどのような仕組みで起こるのかは第2章で述べられています。まず風穴の

出来る場所は比較的大きな石が積み重なっている斜面で、その地下には残雪か氷が春から秋まで残っている場所ということです。そして、その氷が1年を通して残っている風穴、秋までに氷が溶けてしまう風穴、氷が無い風穴に分けられるということです。夏でも10℃以下の冷風が吹き出すという不思議な現象が何故起きるのかという疑問には、冬の間の地上と地下の気温差によって大気が地下の空隙を通して対流しているという説が有力のようで、これを裏付ける実験も紹介されています。

第二部は全国の風穴について、人々の利用の歴史があてられています。風穴が発見された各地から、人々と風穴の関わりの調査、研究の報告で、具体的に有益な記事がたくさんあります。とくに、風穴という自然現象をその土地の人々が歴史的にどのように利用してきたかについて詳しくのべられていて、地方史の資料としても価値の高いものと思われる。

第三部では、全国にある風穴の実態についてその土地でじっさいに調査している人々からの報告があり、日本にはこんなにも風穴があり、それを多くの人々が研究していることに驚かされます。

風穴のある場所の植物は、その地域より北方または高標高に生育するものが多く、たとえば、エゾヒョウタンボクなどがその例としてあげられています。風穴の数は、全国でも長野県が一番多く、上田付近でも30カ所もみついています。上田付近の風穴のある場所にいってみると、冷気の吹き出す穴の近くは湿気が高く、付近に大型のシダ植物が目立ち、周りの岩にはコケ類が繁茂しています。このコケ類の一つを茨城県自然博物館に同定をお願いしたところにオオトラノオゴケというコケであることがわかりました。

今後風穴と植物の研究も盛んになっていくと思われます。

* 林 一六 〒386-0005 長野県上田市古里 173-5